

教職をめざす みなさんへ

“Docendo discimus”

文学部 史学・文化財学科

准教授 飯坂 晃治

古代ローマのことわざに、“Docendo discimus”（ドケンドー・ディスキムス）というのがあります。このことわざは「われわれは教えることによって学ぶ」という意味のラテン語で、有名な哲学者セネカ（前4年頃～後65年）の『倫理書簡集』のなかの一文（Sen. Ep. 7, 8）に由来するものです。

このことわざの意味するところは、たとえば教育実習であれ、教壇に立った経験のある方ならば、すぐに理解していただけるはずで、授業者は、中学や高校であれば50分前後、大学や市民講座などであれば90分前後の授業ないしは講義を担当しますが、その実施に際しては入念な準備をすることになります。私が専門とする歴史に関していえば、教科書や参考文献を読み込んで、資料やスライドを作成し、説明内容を整理して授業に臨むこととなります。とくに歴史の授業では、文献から吸収した知識をそのまま提示するだけでは伝わりにくいので、歴史の流れなどの観点から知識を体系化して、受講者に理解してもらえるようにわかりやすく話さなければなりません。したがって、授業の準備には多大な労力と時間を要しますが、しかしそのことにより、授業者はその授業で扱ったテーマに関する知識を誰よりも自分自身のものとして獲得できるように思います。これは、授業者の特権といっても過言ではないでしょう。私にとって授業とは、私自身が歴史研究者として学ぶべき知識を修得する格好の機会であり、授業をおこなうことの重要な意味のひとつはそこにあると考えています。

ところで、この文章を読んでいる方のなかには、

「生徒に何かを教えたい／伝えたい」という思いから、中学や高校の教職を志望する方もいることと思います。では、そのような思いをお持ちの方にとって、冒頭の“Docendo discimus”ということわざは、どのように聞こえるのでしょうか。私には、「われわれは教えることによって学ぶ」というこのことわざは、裏を返せば「授業をすることで授業者が学ぶものがなければ、それは授業とはいえない」という意味にも読めますし、さらにいえば「授業者に学ぶ姿勢がなければ、その者に授業をおこなう資格はない」という意味にも読めるように思います。

ふたたび歴史を例にとるならば、高校の日本史であれ世界史であれ、教科書に記述されている内容のすべてを深く理解することは決して容易ではありません。授業の準備は必然的に、事典などのレファレンス資料や信頼できる研究文献などにあたりながら進めてゆくことになるでしょう。また、中学や高校の歴史の教科書の内容も、少しずつではありますが書き換えられてゆきます。当然のことながら、教科書の書き換えには最新の歴史学研究成果が反映されますから、教科書の改訂の際にどの箇所がどのように書き改められたのかを理解するためには、中学や高校の教員であっても最新の歴史学研究成果を把握しておく必要があるでしょう。したがって、授業を成立させるためには、まず教師自身が研究の手法を修得し、学ぶ姿勢を持ち続けなければならないのです。そして、このような姿勢は、自分よりも可能性にあふれた多くの生徒の能力を低開発しないためにも必要であろうと思います。

とはいえ実際には、教員として高校などで日本史や世界史の授業を担当するとなると、とくに最初の1年ないし2年は、「教えることによって学ぶ」などといったことわざなどを頭に思い浮かべる余裕はまったくなく、毎日ひたすら次の授業のための準備に明け暮れることとなります。地道な努力の積み重ねが必然的に強いられる日々を送ることになるわけですが、しかし、こうした盲目的な努力によってこそ、「教えることによって学ぶ」ことが体感できるのではないかとともに思います。日本史でも世界史で

も、1年間ないしは2年間の授業をとおして、古代から現代までの歴史をひとつおり説明することができたなら、歴史に対する理解はそれまで以上に深まるに違いありません。そして、こうして得た「学び」は必ずその後の授業に生かされることとなるでしょう。教師自身が学習者として学問に真摯に取り組むことにより、授業が向上し、そこから生徒との信頼関係が醸成されてゆくものと私は考えています。

教職をめざすみなさんへ

文学部 国際言語・文化学科

講師 後藤 昭三

「あなたは、なぜ教師になりたいのですか。」そして、「自分の理想とする教師はどんな教師ですか。」と質問されたら、あなたはどうか答えますか。一度、じっくり考えてみて下さい。

本学に入学する前から教師になる夢を持っていた学生、学修する中で教師をめざすことを決めた学生、いろんなケースがあると思います。しかし、教師をめざすと決めたとき、あなたは「こんな教師になりたい」と思ったことがあるでしょうか。一度、じっくり考えてみて下さい。答えは、みなさんが今まで出会ってきた多くの先生の中にあるかも知れません。

私が、なぜ、このような質問をしたのかと言うと、何事においても志、目標がなければ自分の夢を実現することが出来ないと言うことです。教師になるためには多くの困難を伴います。大学4年間で学ぶことが多くあると言うことです。専門科目の学修、教職科目の学修、そして、教育実習等、他の学生よりも多くの科目を修得しなければなりません。生半可な気持ちでは途中でくじけてしまいます。どうか強い志を持って自分の夢に突き進んで下さい。

私は本学に赴任する前、34年間、大分県内の高校で芸術科書道の教員として勤めてきました。34年間、いろんな経験をする中で、教師は生徒とともに

に歩むことだと私は考えています。生徒とともに歩める教師になるために、今みなさんがやらなければならないことは、まず、自分が所属する学科の専門性を高めることです。講義だけでは足りません。自らの学修で専門性を高めて下さい。これは、教師になってからも同じです。教科指導に役立ちます。生徒に嘘を教えるのは絶対だめです。なぜなら、生徒がついてきてくれなくなるからです。常に勉強が必要です。

次に、教職課程の科目です。教師は授業だけすればいいものではありません。学校運営の一員です。そのために必要な科目が教職課程の中にあります。教育基本法から始まり、教育課程論、生徒指導論、教育相談論等、学修しなければならないことが沢山あります。これは、大変必要なものです。しっかり学修して下さい。現場では、新卒で教師経験がなくても一人前の教師として扱われます。授業から学校運営の一員としての仕事もやらなくてはなりません。こんな時、大学時代の学修が役に立つのです。

みなさん、強い志を持ってあきらめることなく、しっかり学修し充実した学生生活を送って下さい。

「教師をめざす」と決めたときからあなたは教師の卵です。教師になるために必要なことを真剣に学んで下さい。